出れない４　サンプル

触手（強制連続絶頂・尿道責め・精巣からの精子直飲み）
ディープスロート（四肢・全歯欠損）
飲尿
尿道ブラシ洗い（メントールローション）
痴漢プレイ
燭台（尿道蝋燭）・エネマグラ・鞭打ち蝋剥がし
浴尿オナニー
睡眠姦　等

★　★　★

この部屋に来て、一体どれほどの時間が経過しただろう。
際限のない性欲に、以前決めた『プレイは週に二回』というのはとっくに消え失せていた。
「諒くん」
「はい」
オムツ替えもミルクも終わった午前十時。
「最近ＤＶＤが減ってきただろう」
「……はい」
「また増やしてほしい」
篠崎の言うＤＶＤとは、オナニーで妄想した内容を映像化したもののことだ。どういうシステムなのかは分からないけれど、声にも出さず、人にも言わず、ただ一人自分の頭の中だけで妄想した内容が、まるで現実に存在した時間を撮影したかのようにＤＶＤに記録されていた。
そのＤＶＤを二人はたくさん観た。最初は安西のはしたない妄想ＤＶＤばかりだったが、篠崎のＤＶＤが新たに出現してからはそれも数枚観た。
そして篠崎は、観終えたＤＶＤを他の棚に除けていった。
つまり、今元々の棚に残っているＤＶＤは未視聴のものだけ。
篠崎が言う「減ってきた」とはそれら未視聴ＤＶＤの枚数のことだった。だから「増やしてほしい」と言うのは、またオナニーをしなさい、ということだ。
「……篠崎は増やさないんですか」
「ん？　ハードなのをされたいのかな」
篠崎が口角を上げた。意地悪なことを考えているときの顔。普段優しい篠崎は時折こんな風に嗜虐の顔を見せるようになった。この顔を見ると、今度はどんな意地悪をされるのかとドキドキするけれど、それを嫌だと思ったことは過去一度もなかった。
「されたいです。篠崎の好きに使われたい」
それは以前から伝えていたことだ。そして篠崎は先日、それを叶えてくれた。

この空間の主であるタブレットが出現させた魔法のような石。それを握って身体の変化を想像すると、そのようになる。そのとき安西は痛みもなく四肢をなくし、プレイの途中からはペニス、陰嚢、視覚、聴覚、そして最終的には前立腺もなくした。

正確には、前立腺についてはなくしたのではなく『取り出されて』いた。体内から取り出されてもなお感覚の繋がりを残した前立腺は篠崎に舐められ、甘噛みされ、安西は強すぎる快感に泣き叫んだ。気が狂うと思うほど強い快感だった。

けれど、またしてほしいと思った。快感が強すぎて確かに少し恐怖心はあるものの、それでも普通には感じることのできないレベルの快感の虜になっていた。

けれど篠崎は『いくら欠損に痛みが伴わないとはいえ、身体に負担がかかるから』と言って連続ではしてくれなかった。

「なら諒が俺にされたいハードなことを想像してオナニーしたらいいんじゃないか」

あぁ、そういう発想もあったのか。気付かなかった。けれどそれで篠崎の願望は満たされるのだろうか。

「ん？　どうした」

「……篠崎はそれで満足できるんですか」

だってそれでは結局安西の希望を聞いているのと変わらない。

「俺は諒くんがどんどん俺好みに変わっていくのが嬉しいんだ。だからオナニーの内容の変化も楽しませてもらうよ」

そう言われれば、応えないわけにはいかなかった。

「あ、あの、今するんですか」

「無理なのか」

まだ午前中だ。窓から入る陽も明るい。それに篠崎が見ている前でオナニーをするなんて。

「あぁ、もし道具を使うのなら始める前に出してもらった方がいい」

「……はい」

「ＤＶＤ、まずは今日五枚増やしてくれ。棚が一つ埋まったらプレイをしよう」

「えっ」

棚はかなり大きいものだ。一つの棚に二百枚は入るだろう。埋まったらプレイ、ということはそれまで毎日オナニーをし続けないといけないということだ。

「無理かな」

「……します……」

たくさん射精しないと、篠崎にプレイをしてもらえない。おちんちんが痛くならないといいな、と思った。

二週間後――。

「ぁっ、ううっ……」

おちんちんが痛い。もう何度射精しただろうか。

ＤＶＤを増やすように言われてから二週間、毎日何度も何度も射精し続けている。
「がんばれ……」
「ううっ、あっ、あ、あ、あああっあああ！！」
篠崎の頑張れ、は最高のスパイスだ。つらいことを強いている本人からの頑張れという言葉。その矛盾が興奮を高める。
「あぁ、上手に射精できた。いいこだ。頑張ったな」
「おちんちん、痛い……」
「うん、少し皮が剥けている。痛いな。薬を塗ろうか」
タブレットに一言告げればこんなものはすぐに治る。けれど安西がお世話をされることが好きだと知っていて、篠崎は薬をと言ってくれているのだ。
「はい……お薬、おちんちんに塗ってください」
今日だけで七回射精した。この空間にいる間、射精は無制限にできるらしい。けれどそれを体験しようとすると皮膚や粘膜が大変なことになるし、精神的な疲労も半端ではない。でもしたいと思ってしまうのだ。だって篠崎が見ているから。頑張れって言ってくれるから。
そう思いながら、この二週間何度射精しただろう。薬だって毎日塗られ続けている。
「んっ……」
「滲みるか」
「はいっ……ああっ！」
ヒリヒリと痛みを訴えるおちんちんに塗り込められる冷たいクリーム。痛い。滲みる。けれどそのピリピリした痛みがまた性欲を呼び覚ましてしまう。
「あ……やだ、もう……」
もう射精したくない。休憩をしたい。それなのに篠崎に丁寧にクリームを塗られたおちんちんは熱を持ってしまった。
「諒くんよりおちんちんの方がいい子かもしれないな」
「やっ！」
ひどい。頑張っているのに。こんなにたくさんおちんちんを虐めて頑張っているのに。
「なら、もう一度頑張って射精できるかな」
「……射精、するから見てて……」
あぁ、こんなだから『次は何を想像しよう』なんて考えることなくオナニーを始めてしまえるのだ。
次のオナニーの妄想は、強制連続絶頂だ。

『ああああっ！！！！苦しいっ、もおやああっ！』
どんなに泣きわめいても、触手は動くことを止めない。アナルには太い触手がぐりぐりと最奥を目指してめり込むし、それよりももっともっと細い触手は先端から真っ赤な舌のようなものを出して尿道口をちろちろと舐めている。そしてタマは先端が口のようになった触手に飲み込まれていた。

手足は他の触手に拘束され、身動き一つ取れない。逃げたい。けれど絶対に逃げられない。
『ああああっ！！』
尿道口を舐めていた触手がその舌を伸ばして尿道内に進入を果たした。レロレロと尿道を舐めながら進んで行く。こんなの機械では決してできない感覚だった。だって尿道内を舐められるなんて――いや、できる。尿道産卵を終えたばかりの拡がった尿道なら篠崎に舐めてもらえる。あぁでも今は普通サイズ――あくまで安西にとっての通常サイズ――のおちんちんではこんな風に尿道を舐めてもらえることはない。
それに何やら舌はぬるぬるしたものを分泌しながら進んでいるらしい。そのぬるぬるが口を閉ざすことを許さぬほどに気持ちいい。
『ああああああああ！！！』
もっと、もっと舐めてほしい。進入をゆっくりにしてほしい。じゃないとすぐに前立腺に届いてしまう。あぁでも前立腺も舐めてほしい。篠崎が取り出した前立腺を直接舐めてくれたときは最高に気持ち良かった。
『ああああああああああ！！！』
舌が前立腺に到達した瞬間、アナルに入っていた触手が直腸側から前立腺を吸った。まるで吸盤のように吸ったのだ。前からは舐められ、後ろからは吸われる。目の前がチカチカした。けれど射精はできない。触手の舌がみっちりと入っているせいで。
『ああああああ！！　出したいっ！　出したいいいい！』
腰が揺れる。おちんちんを入れた経験もないくせに腰が前後にはしたなく動く。この動きはきっと本能なのだ。男としての本能。でも身体はもう違う。入れるより入れられる方が好きという雌の身体だった。
『はしたないな』
『えっ？　あっ！』
焦点の合わない目で必死に声のした方を見ると篠崎がいた。篠崎が優雅に一人掛けのソファに座り、酒を飲みながらこちらを眺めていた。
『ああっ！　ああああっ』
なんで見てるの。苦しいのに、助けてほしいのに。
『ほら、きちんと精を出さないと。お腹が空いたと言っているよ』
あぁ、そうなのか、この触手にとっての餌は自分の精液なのか。それならたくさん射精しないと。
あぁでも舌が邪魔だ。触手の舌が邪魔で精液が出せない。出したい。舌を抜いてほしい。けれどもっと快感を与え続けてほしい。気持ちいい。タマも触手の咥内で揉まれ、甘噛みされている。気持ちいい。全部が気持ちいい。
『あああああああああああ！！！』

〜〜〜〜

「ぁっ！！」
「もうイったのか？　そんなに興奮する想像をしたのかな」

「ぁ……ぅ……」
おしっこの穴を篠崎にブラシで洗ってもらう。そう思った瞬間、射精してしまった。もうおちんちんも擦り過ぎて痛いのに。なのにその痛みさえ無理矢理な連続絶頂によるものと思ったら興奮剤にしかならなかった。
「……しのざき、もう無理……だから、おちんちんの穴洗って……」
「今想像したことか？」
「はい……やだ、もうオナニーじゃやだ、触ってほしい……」
そう発言したとき、隣にブラシが出現した。ブラシと言ってもたわしのような硬いものではなく、柔らかいスポンジのようなもの。長い柄がついていて、スポンジ部分は細い。細かい部分を洗うときに使うような細くて長いものだった。
「……ほう、これが諒くんが想像したおしっこの穴を洗うためのブラシかな」
「……はい……それで僕のおしっこの穴、洗ってください」
「これで、擦られたい？」
篠崎の目に鋭さが窺えた。興奮。嗜虐のスイッチが入ったのだ。
「はい……でも暴れないようにしてほしい……」
「……四肢をとっても？」
「はい」
言わなくても分かってくれる。嬉しい。正直もう、普通の拘束では物足りなかった。
篠崎は石を持ち歩いているらしい。その便利な石は篠崎のポケットから姿を見せた。
そっとマットに寝かされる。
「背中は痛くないか」
「大丈夫です」
篠崎は一つ頷き、その石を握って黙った。
瞬間、痛みも違和感もなく手足が消えた。
「……大丈夫か」
「はい」
嬉しいな、と思う。篠崎は強引にしてくれることが多いけれど、それは全て怪我がないか、不快感がないかを確認した状態で行われる。
「……諒」
篠崎の声に熱がこもる。さっきより、更に。
「篠崎、待って」
「なんだ」
その返答の速さに篠崎の余裕のなさが窺えた。嬉しい。
「ロ、使ってください。僕の口を使って射精して」
だってこんなに興奮しているのに、今の安西にはどうやっても奉仕することができない。奉仕したい。篠崎を気持ち良くするために何かをしたい。でもできないから、使ってほしい。

「口、使って。歯も消して」
それならどんなに嘔吐反射が起きようと噛んでしまう恐れはない。
「っ」
篠崎は今まで一度も見せたことのないような余裕のない表情をしていた。そして石が握られ、口の形が変わった。歯がないから頬も凹む。
「あぁ、諒……俺だけのオナホール」
「はぁひ」
言葉を発することは難しそうだ。早く使ってもらえるようにと大きく口を開ける。
「諒っ」
篠崎が急いた様子で手早く服を脱ぎ捨てた。嬉しい。全部脱いでくれたのはきっとこの後のことも考えてのことだろう。
「諒……口を使わせてもらうよ」
篠崎の膝が肩を挟むようにして近付き、そしてペニスが唇に触れた。
「まずは濡らしてくれ」
舌を出し、亀頭を舐める。しょっぱい味がした。篠崎は昨夜一緒に風呂に入った後排尿をしていないから完全にカウパーの味だ。おしっこも飲みたいけれど、勃起していて今は出ないだろうから我慢。
唾液を舌に乗せて亀頭に撫でつける。興奮のせいか唾液にはとろみがあってすぐにいやらしく光った。
「あぁ、上手だ。それでいい。さあ口を開けて」
再度口を大きく口を開けると、亀頭がゆっくりと咥内に進入した。けれどきっと、挿入がゆっくりなのは安西のためじゃない。
篠崎を見る。目を閉じてペニスの感覚に集中しているように見えた。やっぱり。咥内の温度と粘度をゆっくりと味わっているのだ。
「あぁ……諒……」
嬉しい。篠崎が感じている。玩具にされる。
歯がないから、いつものように遠慮する必要がなかった。思いきり口を窄め、ペニスを締め付ける。
「っは、諒……」
篠崎がゆっくりと腰を揺らした。上あごに亀頭を擦りつけられると安西も堪らなかった。だって上あごは性感帯なのだ。ディープキスのとき、篠崎がよく舐めてくれるところ。しかも今は歯がないから篠崎も気にすることなく、歯があったら無理な角度で擦ってくれる。
「ンンッ……んっ」
まだ喉を突かれていないからか、快感だけを拾うことができた。気持ちいい。口を犯されている。性器で口を――。
「んんっ、んんんんっ！」
動きが少しずつ早くなる。篠崎の息が上がっていく。上あごを狙っていたペニスが向きを変え、奥へ奥へと進入を目指す。
「うっ！！」

亀頭が喉を突いた。吐きそうになる。けれどなるべく口を大きく開けることを意識し、喉を開く。
「あぁ、諒……本当に気持ちがいいよ」
そうやって優しく褒めるように頭を撫でられると嬉しくなってもっともっと奉仕したくなる。
ぎゅう、と更に口に力を入れ、ペニスを上あごと舌で押し潰す。
「ん？」
篠崎が動きを止めた。止めようとしたのが分かったのだろう。どうした、と視線で問われる。
けれど今は返事をすることはできない。咥内に入れられたままの亀頭をゆっくりと舌で奥へ促す。篠崎は視線を合わせたまま舌の動きに合わせて腰を進めてくれた。
ピストンじゃない。ただゆっくりと近付けてもらう。そして喉に亀頭が触れたところで唾液を飲み込む準備をする。そして目で合図をすると、理解した篠崎にぐっと腰を押し付けられた。
「っ！！！！」
亀頭を飲み込んだ。喉が開きっぱなしになる。目がちかちかする。苦しい。冷や汗が流れる。けれど篠崎はゆっくりと腰を動かした。
「んんんん！！！！！！！！！！！！」
カリが喉に引っかかり、苦痛をもたらす。けれど篠崎はその引っかかりを楽しんでいるようだった。
「っは、諒……すごいな、いつこんなことを覚えたんだ」
篠崎がぐっと頭を掴んだ。けれど痛みはない。頭を固定しているのだろう。きっと苦しさで暴れたりしないように。
「っはぁ、諒……出すよ……喉に直接出す」
「んんっ！！」

〜〜〜〜

篠崎はブラシと共に出現した小さなボトルを手に取った。そしてボトルの裏面をじっと見ている。
「篠崎？」
「あぁ、成分表を見ていた」
成分表、ということはブラシと出現したことからもそれはボディソープや洗剤の類ということだろうか。それにしてもそんなことまで書いてあるとは。もしかして現実にあるものなのだろうか。そう言えばここに用意されていたシャンプーやボディソープもデザインから何から全て家にあるものと同じだった。このボトルについては見たことがないけれど。
「……諒くんは耐えられるかな」
「え？」
「身体に直接的な影響はないが、かなりきつそうだ」
「え……何、何ですか」
篠崎は不安を煽るようなことばかり言うけれど、四肢がないままの安西には逃げることも、見せてとボ

トルに手を伸ばすこともできない。
「……しのざき……？」
「これはローションだ。滅菌効果のある、医療用として使われるようなものだ。分かるな？」
それなら分かる。カテーテルを尿道に入れるときに使うようなものだろう。
「これは恐らく普通のものではない。部屋の主が特別に作ったものだろう」
「何……？」
滅菌効果があるのならそれでいいと思うのだけれど。それともそもそも尿道を洗うというのが普通の行為ではないから粘膜を守るような成分が入っているとかそういうものだろうか。
「……成分に、ハッカが入っている」
「……ハッカ……」
「メントールだよ」
それがどういうことかはすぐに分かった。
「……や、無理です、そんな……」
尿道を洗うというのはあくまで比喩的な発想だ。本来洗う必要のない粘膜部分。そこを洗うと言うことで興奮する、言わばただの尿道プレイなのに、それにメントールを使うなんて。
「でも、諒くんはとても好きだと思うよ」
篠崎がほくそ笑んだ。
そして篠崎の手が恐怖に萎えたおちんちんを抓む。
「ひっ、やっ、やめっ」
手足がない安西には胴体をバタつかせることしかできない。それでも篠崎には何の影響もないようだった。おちんちんの皮をそっと剥かれ、亀頭を露出させられる。萎えた状態では皮が余っているけれど、手足を抑える必要のない篠崎は両手を自由に使うことができた。
「可愛い亀頭だ。擦られ過ぎてちょっと赤いかな」
そう言って篠崎が顔を下げた。ダメ、と思わずぎゅっと目を瞑る。
「あああああ！！！」
篠崎が剥き出しの亀頭を口に含んだ。気持ちいい。今日一日散々オナニーで擦られ続けたおちんちんは扱く以外の刺激を久しぶりに受け、喜んでしまっている。心と身体が一致しない。やめてほしいと本気で思っているのにおちんちんはそれを裏切りもっともっとと硬くなる。
音もなく、けれど篠崎の舌は的確に亀頭を虐め抜いた。

〜〜〜〜

「おちんちん融けるううう！！」
叫んだ瞬間、尿道口が解放された。恐らく漏斗が抜かれたのだ。でも楽になったのは一瞬だった。だって、次は――
「ひぎいいいい！！！　あぎゃあああああ！！」

獣のような声が浴室に響いた。メリメリとスポンジブラシが尿道を割り入ってくる。
「っく、諒っ、力を抜けッ」
「むり、むりいいいい！　融けるうううう！」
痛い。熱い。融ける。
「諒っ、大丈夫、おちんちんはあるよ」
「あああああああ！！」
篠崎がブラシを動かした。ぐちゅぐちゅと水音を響かせ尿道内をブラシで擦っている。
「あああああああああ！！」
「諒、つらいけれどちょっと我慢しておちんちんの中きれいきれいしような」
「あああ！！！　いだいいいい！！！」
尿道の粘膜が、秘肉がスポンジで上下に強引に引きずられ、擦られる。痛い。なのにおちんちんが萎えないのはなぜなのだろう。痛い。けれどきっと身体は快感を見つけているのだ。安西が気付いていないだけで。
「諒、ゆっくり息をするんだ」
篠崎の声が聞こえる。目が見えず、四肢もない今の安西にとっては声とアナルに入れられたペニスの感覚だけが頼りだった。

〜〜〜〜

ソファの前に置かれていたテーブルが突然サイズを変えた。奥行は変わらないけれど、安西の身体が乗るくらい幅が長くなったのだ。
「横になって」
「はい」
オムツを外され、全裸のままテーブルに寝転ぶ。
「背中は痛くないか」
「大丈夫です」
篠崎がソファにあったクッションを頭の下に入れてくれる。優しい。好き。
「じゃあ、おちんちんを勃起させて」
「え……僕が……？」
自分でしないといけないのだろうか。篠崎にしてもらいたい。だって恥ずかしい。
篠崎はしっかりと服を着て、普段と変わらない様子でゆったりとソファに座って酒を飲んでいるのだ。自分だけが全裸で、本来ならば乗るべきでないテーブルの上に乗って身体を曝している。
「今の諒くんは燭台なんだよ。きちんと燭台としての仕事をしてほしいな」
「はい……」
そうか。燭台の仕事、なのだ。

手を伸ばし、おちんちんに触れる。そこはまだ柔らかい。けれど酒を飲む篠崎を見た途端、すぐに硬くなり始めた。篠崎が射るような視線で安西のそこを見ていることに気付いたからだ。
「あぁ……んっ、ぁん……」
篠崎は無言で酒を飲んでいる。ゆっくりと飲みたい、とはきっと安西の卑猥な姿を長く楽しむためなのだろう。
「……篠崎……おちんちん勃起しました」
「燭台になる用意ができたということかな」
「はい……おちんちん……燭台に蝋燭を挿してください」
篠崎がテーブルにグラスを置いた。安西の腰の辺りだ。狭いので動いたら肌に冷たいガラスが触れるだろう。勢いよく動けば床に落としてしまうかもしれない。
「お願いします」
挨拶をして、じっとそのときを待つ。
篠崎が真っ赤な蝋燭を手に持った。そして何かを付けている。きっとローションだろう。恥ずかしい。だって、このおちんちんはもう穴を慣らされることなく蝋燭を咥え込めるということだ。
「入れるよ」
「はい……おちんちん使ってください」
興奮してカウパーが漏れそうだった。けれどそこには栓がされる――栓が――
「あああああ！！」
それほど太くない蝋燭はずずずっとローションのぬめりを借りて入ってきた。
「ああああ……」
「痛いか」
「……痛くないです……」
この程度では痛みを感じない程、尿道は開発されてしまっている。拡げられてしまっている。
「じゃあ火を付けるよ。萎えたら危ないから、萎えそうだと思ったら自分で扱いて硬さを維持しなさい」
「はい……」
こんなに恥ずかしくて気持ちいいのに萎えたりするのだろうか。けれどそう思う裏で、亀頭を蝋が流れていく痛みを思い出していた。
しゅ、と音がしてマッチに火がつけられた。その姿もさまになる。かっこいい。見惚れてしまう。うっとりと見ていると視線に気付いたらしい篠崎がこちらを向いた。口角が上がる。かっこいい。
篠崎は視線を戻すと無言のままおちんちんに刺さった蝋燭に火を灯した。
「ああっ……」
亀頭がぼんやりと温かくなる。
「綺麗だ」
ふ、と部屋の明かりが消えた。外はもう暗い。明かりは燭台に灯る火だけになった。
「あぁ、とてもいいな」
篠崎がグラスを取り、ソファに背を戻した。まるで俳優のようだ。

（この人に今、捧げてる――……）
こんなに素敵な人のために、その人を癒す時間のために自分が局部を差し出しているのだと思うとひどく興奮した。
篠崎がおちんちんに刺さる蝋燭の火を見ながら酒を飲んでいる――。

～～～～

篠崎が一歩離れ、鞭を構えた。大切なおちんちんを鞭で打たれてしまう。怖い。
怖い――
バシッ！
「ぎゃあああああああああああ！」
鞭はしっかりと勃起を打った。
「……まだ少ししか剥がれていないよ」
「やっ、もうっ、ごめんなさいっ、やだっ、無理っ、あああああああああ！！」
またバシッ！とおちんちんが叩かれる。萎えていても、容赦なく叩かれた。
「あぁ、やはり萎えているときはダメだな。足の付け根まで赤くなってしまった」
痛い。全部痛い。けれど足の付け根の痛みなんて感じないも同然だった。だっておちんちんが痛いのだ。取れてしまうんじゃないかと思うほどに痛い。
「今度は軽く叩くよ」
「はい……」
もうやめて、と言いたかった。けれど篠崎は絶対にやめないだろう。なら耐えるしかない。
（終わったら、また蝋燭で、その後におしっこ掛けてもらえる……）
与えられる予定のご褒美を必死に頭の中で繰り返す。だから頑張れ、と自分に何度も言い聞かせて。
バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！
「ぎゃあああああああ！！」
先ほどより確かに振りかぶり方は優しい。けれど一息吐く間もなく連続で打たれるのもつらかった。
「諒くん、お尻を締めなさい」
締まっている。締めているつもりは一切ないのだけれど、痛みで腹筋はぎゅーっと縮こまり、アナルもぎゅうぎゅうに玩具を締め付けていた。
「……やはり痛みが強すぎるか」
そうだ。だって急所を鞭で打たれているのだ。それでなくてもオナニーのしすぎで皮が剥け、その上に蝋が垂れて固まっているのだ。それを鞭で叩かれ無理矢理剥がされているのだからどんなに被虐性の強い安西でも簡単には勃起なんてできなかった。
「じのざぎ……」
「あぁ、そんなに泣いて……」
可愛いお顔がぐちゃぐちゃだよ、なんて言うけれど、今日何度目か分からない。精液以上に涙と鼻水を

垂れ流している。
「でももう少しだよ。今日は蝋自体以前ほど多くなかったから。あとはカリの辺りを剥がせばおしまいだから、頑張れ」

〜〜〜〜

眠りについた諒の口から哺乳瓶を抜く。ベッドに放るとそれは音もなく消えた。
「……諒」
試しに呼んでみる。けれど諒は可愛い顔ですやすやと眠っている。細く隙間の開いた唇が可愛い。けれどさすがに塞いだら起きてしまうかもしれない。
薬の強さが如何ほどなのかは分からない。どの程度の刺激で目を覚ますのか――ただ睡眠薬入りのミルクを、と心の中で希望しただけだ。それだけでタブレットは的確に出現させてくれた。
「タブレット、薬の強さは」
置きっぱなしにしているタブレットに声を掛ける。それは即座に反応を返してきた。
【篠崎さんが望む程度です】
自分が望む程度。つまり何をしても起きない、ということだ。
「いつまで寝ている」
【篠崎さんが安西さんに「起きろ」と声を掛けるまでです】
それならば好きなことを好きなだけできる。もちろん苦痛を与えるつもりはないけれど、無防備な寝顔の諒を抱きたいという夢が叶う。
「刺激を感じるのか」
【痛みも快感も、与えられた感覚は夢の中で感じています】
「俺がしていることを、夢の中で諒が体験するということか」
【その方が宜しければそうします】
どうしようか、と考える。単純に寝ているところを抱くことしか考えていなかったけれど、夢の中でも抱かれているとなると起きたときに夢の中の出来事だと気付かないかもしれない。どうせなら全く関係のない夢を見ているところを抱いて、起きたときの衝撃に恥ずかしがってほしい。
「刺激を感じさせないでくれ」
【承知しました】
「夢の指定はできるか」
【可能です】
「ピクニックで弁当を食べるような平和な夢を見せておいてくれ」
【承知しました】
タブレットとの会話を終え、諒のオムツを剥がす。濡れていない。別にセックスの途中で漏らしても構わない。そのまま放り投げ、まだ柔らかいままのアナルに遠慮なくローションをぶち込んだ。
諒は全く動じなかった。感覚が通じていないのだから当然だろう。幸せそうな顔をして眠っている。き

っと美味しいものでも食べているのだろう。涎が垂れたら舐め取ってやろう。そう思いながら何も着けずにペニスを挿入した。

「っ……」

中は燃えるように熱かった。襞の一枚一枚が絡みついてくるような気さえする。普段は諒の快感を優先しているし、それが自分のしたいことなので文句はないが、今日は諒の身体を本当の玩具として扱うことができる。諒もよく「物として扱ってほしい」「玩具として使ってほしい」と言うけれど、それだけでは足りなかった。意識がないときに使うからこそ本当の玩具なのだ。

5万1千文字くらいです。よろしくお願い致します。

gooneone